

[論 文]

## 戦時期京都帝国大学の文献疎開における 和漢書の選定に関する研究

かわぐち ともこ  
川口 朋子  
(京都大学)

### 抄録

本稿は、京都帝国大学附属図書館が1944年と1945年に実施した2度の文献疎開について、特に1944年の第1次文献疎開時に作成された和漢書の日録2点を分析し、疎開和漢書の選定過程及びその特徴について解明を試みるものである。

疎開和漢書は甲種と乙種合わせて3,005冊あり、貴重和漢書を抽出した日録をもとに現物確認作業を実施した結果、疎開不要と判断した一部の複製本を除外して選定された。その結果、疎開和漢書の実態には偏りが見られる。また、第2次文献疎開の日録が確認されない背景として、戦況の悪化に伴う文献疎開事業の変質性を検討した。

### 1. はじめに

第2次世界大戦末期、国内では官立や公立、私立など図書館の形態を問わず、少なくない数の図書館が書物を戦禍から守るために文献疎開を実施した。これらの事実についてはある程度確認でき<sup>1)</sup>、京都帝国大学附属図書館（以下、京都大学附属図書館）や日比谷図書館のように文献疎開の実態を検討した研究も見られるが<sup>2)</sup>、一次資料を用いた本格的研究は見られない。

文献疎開は戦時期に都市疎開事業として推進された建物疎開や人員疎開と異なり、法令では規定されておらず不要不急の事業であった<sup>3)</sup>。ゆえに、各図書館が自前で文献疎開を実施した意義が大きいことは明らかであろう。

しかし、だからこそ書物がいつどこへ運搬されたのかという現象面だけでなく、戦時下の文献疎開とは何だったのかという事業の本質の側面を問う研究が必要だと考える。特に大学図書館の場合、貴重な学術資料で大学の財産でもある書物類を一時的とはいえ学外で管理せざるを得なかった事態は、大学の歴史においても特異な出来事であった。戦時末期という時代ゆえに資料的制約は免れないが、本来、大学図書館史において十分な調査が必要なはずである<sup>4)</sup>。

本稿では京都大学附属図書館が実施した文献疎開について、特に1944年の第1次文献疎開を取り上げ一次資料に依拠しながら実証的調査を実施した。その際1944年当時、京都大学附属図書館が事務用目録として作成した『本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録 附点検控』及び『本館所蔵貴重和漢図書 疎開荷造目録』を分析に用いた。以前、筆者は京都大学の文献疎開についてこれらの目録を用い全体像の解明を試みたが<sup>5)</sup>、目録資料そのものに対する十分な検討は不足していた。目録には疎開した和漢書の書名だけでなく、これらの疎開本を決定するまでの作業過程や判断基準に関する情報も含まれており、疎開本に選定された理由や、逆に疎開本から除外された理由もうかがえる<sup>6)</sup>。選書に関するこれらの情報を整理、分析することで京都大学附属図書館は文献疎開にどのように対峙したのか、当時の認識を理解することが可能になるはずである。

本稿の目的を改めて整理すると、京都大学附属図書館の文献疎開について特に疎開目録に基づいた実証的調査を通じて、和漢書を選書した過程や選定基準を検討することである。戦時期の文献疎開とは何だったのかという事業の本質の側面を検討するための一助としたい。

なお、本稿では読みやすさを考慮し資料を引用する際には片仮名を平仮名に直し、旧字は新字に改めた。

## 2. 京都大学附属図書館の第1次文献疎開と疎開目録

### 2.1. 第1次文献疎開の開始

明治末期の開館以降、附属図書館に関する重要事項は附属図書館商議会で決議されてきた<sup>7)</sup>。商議会で文献疎開の議題が初めて確認されるのは、1944年4月17日である。前年10月の文系学部学生に対する徴収延期停止や、大学に残った学生に対する勤労働員の強化を受けて、構内では学生の姿が激減し、附属図書館でも仮閲覧室と第2閲覧室を併合縮小するなど閲

覧体制を大幅に縮小した矢先のことであった<sup>8)</sup>。

商議会で文献疎開の実施が決議されると、同年5月4日には文献疎開案が作成された。文献疎開案とは保管場所、疎開文献の選書、輸送、荷造、疎開後の管理方法、保管契約などについて具体的にまとめた要項である<sup>9)</sup>。文献疎開案によれば、疎開場所の選定は「敵弾直撃の可能性、兵火以外の火災、盗難、運送の便宜、臨時点検の便利、文献疎開上の設備及湿度等の見地」から検討された。職員らによる実地調査の結果、京都市西部の嵯峨大覚寺宝蔵（現在の京都市右京区）と京都府南桑田郡保津村（現在の京都府亀岡市保津町）の個人所有の土蔵が疎開場所に選定された（図1）。

第1次文献疎開で対象となった書物類（和漢書、洋書、美術品等）は当初5,557点であり、そのうち和漢書は3,471冊であった<sup>10)</sup>。疎開書物の大半を和漢書が占めた背景には、附属図書館が創立当初より特に古典籍の収集を推進し、和漢書の珍籍・稀書に恵まれていたという事情も影響したと考えられる<sup>11)</sup>。

## 2.2. 『疎開点検目録』

京都大学附属図書館所蔵『本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録 附点検控』（以下、『疎開点検目録』）及び『本館所蔵貴重和漢図書 疎開荷造目録』（以下、『疎開荷造目録』）は、どちらも京都大学の用箋（日本標準規格B4）を厚紙で綴じた和綴じ本で、大きさは縦25.5cm、横18.0cmである。表紙にそれぞれの目録名称が書きつけてあり、どちらも内題には1944年6月の日付が記されている。よって、第1次文献疎開の際に作成された事務用目録だと言える。

図1 京都大学附属図書館文献疎開地



『疎開点検目録』は疎開文献点検掛と貴重和漢書掛が作成した。全部で84頁あり、構成は次のとおりである。[ ]内は各項目の頁数である<sup>12)</sup>。

表表紙

遊紙 [1-2]

内題 [3-4]

目録作成の趣旨及び第三書庫和漢貴重書排置図 [5-6]

凡例 [7-8]

追加図書並に旧目録所蔵の排列不同図書 索引 [9-12]

本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録 [13-58]

追加図書 [59-66]

点検控 [67-68]

貴重図書目録点数移動調査 [69-74]

不在架図書 [75-76]

残置図書 [77-78]

事故図書 [79-82]

遊紙 [83-84]

裏表紙

「目録作成の趣旨」には次のような記述が見られる。

この目録は昭和十九年四月二十一日和漢書目録掛の作成したる「本館所蔵貴重図書目録」をもつて第三書庫二階貴重和漢書々架並に一階一部（位置別図の通り）を点検し、各文献についてその在不在、冊（点）数の合不合、正規整理手続の完未完を調査し、目録記載以外の該書架所蔵貴重文献をも追加図書として調査を同じくし、併せて疎開実施時に於ける種目編成、荷造編成を記録し、これを概ね書名五十音順に排列したるものなり 即ち旧目録の全貌を存して点検並に荷造事項を新に附加し且その要項を一括して点検控として附したり 尚、各荷箱について収容図書を検するためには別冊荷造目録あり

この内容から、4月17日の商議会で文献疎開の実施が決議された後の作業手順が読み取れる。まず、和漢書目録掛が貴重和漢書を五十音順に排列した「本館所蔵貴重図書目録」（以下、旧目録）を作成した。旧目録は当時、

貴重書に指定されていた和漢書をリスト化したものと考えられる。疎開文献点検掛は旧目録を手にした当該書物が配置されている第三書庫と一階へ行き、目録に記載された和漢書について書誌情報等を一点ずつ現物で確認した。確認作業の内容は、後述する四つの点検作業と実質的には同じであることが「点検控」からうかがえるが、「点検控」の詳細については次章で述べる。作業の結果判明した情報は旧目録の情報に上書き修正し、旧目録を「本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録<sup>13)</sup>」(以下、新目録)と改称した。点検作業の結果、旧目録に掲載されていなかった和漢書で新たに疎開が決定したものは「追加図書」(以下、追加目録)に収録された。そのため、新目録と追加目録には各所に修正が施された跡が見て取れ、修正箇所には「移」、「不」、「残」、「事」といった点検作業の内容を表す文字が附されている<sup>14)</sup>。

旧目録のうち2,639点の和漢書の疎開が決定したが、旧目録に記載されていない和漢書366点も貴重和漢図書として追加で疎開することが決定した。追加図書は疎開和漢書全体の約14%に相当する。総計3,005冊となった疎開和漢書は、一冊ずつ疎開地を大覚寺(『疎開点検目録』では甲地と記載。)と保津村(同、乙地と記載。)のいずれかに決定した。最後に書名を五十音順に並び替え、疎開地と荷箱の番号もそれぞれ記載して『疎開点検目録』が完成した。

### 2.3. 『疎開荷造目録』

次に『疎開荷造目録』の構成と内容を見てみたい<sup>15)</sup>。『疎開荷造目録』は全部で50頁あり、各構成及び頁数は次のとおりである。

表表紙

前書き [1-2]

内題 [3-4]

甲地疎開貴重和漢書 荷箱番号並に書冊通号一覧 [5-6]

乙地疎開貴重和漢書 荷箱番号並に書冊通号一覧 [7-8]

甲地疎開荷造目録 [9-22]

乙地疎開荷造目録 [23-46]

荷造目録訂正表 [47-48]

遊紙 [49-50]

裏表紙

疎開荷造目録の場合、前書きには目録作成の目的が次のように記されている。

この目録は昭和十九年六月十一日及び十三日にわたり疎開実施せられたる貴重和漢図書をその荷造り順位により明示したるものなり  
荷造は現物毎に書冊（点）通号を与へ通号順に一定の容積をもつて荷箱に入れ荷箱に荷箱番号を与へたり 但し甲地乙地夫々別個に取扱ひたれば夫々通号の最終番号は両地に於ける現物点数にして最終荷箱番号は荷箱個数なり 両地合計を以て総（点）数又は総個数となす 書名による荷箱検索のためには別冊点検目録を見らるるを便とす

『疎開点検目録』の「目録作成の趣旨」でも『疎開荷造目録』との関係について言及されていたが、『疎開点検目録』に記載された通号順に書物を荷箱に格納した際の情報をまとめたものが『疎開荷造目録』であり、疎開文献点検掛、貴重和漢書掛、疎開文献荷造掛によって作成された。

「甲地疎開貴重和漢書」と「乙地疎開貴重和漢書」によれば大覚寺に28箱、保津村へ43箱が運搬された。「甲地疎開荷造目録」と「乙地疎開荷造目録」には各荷箱に格納された和漢書が書名順に記載され、両目録の日付から、和漢書の運搬は第一陣が保津村で6月11日、第二陣が大覚寺で6月13日であったとわかる。

最後に「荷造目録訂正表」があり、「疎開荷造目録」の中で修正を施した情報について再度取りまとめられている。

### 3. 目録作成過程の分析

#### 3.1. 点検作業

『疎開点検目録』の「点検控」には四つの点検作業（貴重図書目録点数移動調査、不在架図書調査、残置図書調査、事故図書調査）の結果がまとめられている。前述した通り、点検作業により旧目録と追加目録に修正が施された結果、疎開する和漢書やその点数が決定しており、「点検控」の内容は現場の職員が目録作成のために重視した情報を知る手掛かりとなる。文献疎開はその書物の貴重性を評価し疎開する訳だが、人手や物資、輸送手段、疎開地の収蔵空間など限られた条件下で、疎開の必要性がより高い書物を選定する際、現場の職員達はどのような選定基準を設定していたのだろうか。次に、点検作業の内容を見ていきたい<sup>16)</sup>。

### 3.1.1 貴重図書目録点数移動調査

貴重図書目録点数移動調査とは、大学とそれぞれの疎開地で管理する書物の数を正確に把握することを目的とした調査である。紛失を避けるためだけでなく、運搬に必要な荷箱の数を確定するための調査でもある。調査の結果、77部の和漢書に点数の変更が見られた。備考欄に記された調査結果に関する記述より、変更理由をいくつかのグループに分類できる。

まず、最も多いのは疎開を取りやめた場合である。『詩經抄』、『中庸章句』、『百首和歌』、『毛詩抄』が該当するが、いずれも「最貴重書に変更につき」という記載とともに書名に取り消し線が引かれている。最貴重（和漢）書として疎開する書物は、1944年5月4日の「文献疎開案」によれば大覚寺への疎開が予定されている<sup>17)</sup>。同一疎開地にもかかわらず、目録から消去したのは、『疎開点検目録』とは別の最貴重疎開和漢書用の目録が存在したと推測され、そちらに書名を掲載し直したためだろう。

次に、カードで書誌情報を点検した結果、疎開図書から外したケースがある。『熊谷女編笠』や『本朝櫻陰比事』の備考欄には「カードにより普通書に変更」とあり、書名に取り消し線がある。このことから、「目録作成の趣旨」には記述されていないが、現場では書物の現物確認に加えてカードによる点検も実施されたこと、また「疎開点検目録」の疎開和漢書は貴重和漢書であり、普通書や最貴重書は対象外であったことが明らかとなった。

さらに、疎開地を変更した場合も見られる。『岩倉公實記』は当初保津村へ疎開させる予定だったが、大覚寺へ変更された。大覚寺に疎開させる『根本陀羅尼』が入った百万小塔を包装するために『岩倉公實記』の外箱が必要となり、『根本陀羅尼』と共に大覚寺へ疎開させたためである<sup>18)</sup>。運搬上の都合による変更は、『岩倉公實記』以外は見られない。

その他、重複本の除外というケースも少なくない。『雪堂行和尚拾遺録』の場合、変更理由は『大慧普覚禪師宗門武庫』と重出につき削除」と記されている。書名が異なるため当初はどちらも疎開図書に選定されていたが、点数移動調査の結果、内容が重複していることが判明し片方を大学へ残置させた。

最後に、単純に冊数の数字を変更した場合もある。『伊能忠敬翁地図』の場合、当初は1点と数えていたが、当該資料は1つの包紙の中に地図が9葉含まれる構造となっているため「実冊数に訂正」された。逆に合本のため冊数を変更した場合もある。



### 3.1.2 不在架図書調査

不在架図書の項目には236冊の書物が点検番号順にまとめられている。不在架図書とは、旧目録に書名があるが書架に現物が確認できないケースである。その理由は、「国史に貸出中」のように研究室へ貸し出している場合もあれば、「昭和十八年度検索にも不在架」と前年度の蔵書点検で不明だった書物もある。

### 3.1.3 残置図書調査

残置図書調査は他の3つの点検作業と異なり、書物の貴重性に注目し、疎開不要と判断した書物を大学に残置するための調査である。貴重図書目録点数移動調査でも残置された書物があったが、残置図書調査との違いは、前者はあくまで目録上の点数の把握を目的とし、作業の過程でカードによる点検を実施した結果、偶然普通書と判明し残置させた。それに対し、後者は書物の形態も含めて貴重性を評価し、残置すべきか判断するものであった。

調査の結果424冊の残置が決定したが、ほぼ全てが「玻璃版複製」、「写真版複製」、「新しき模写本」のいずれかを理由に残置した。『古事記』のように実際に疎開された和漢書でも、「新しき模写本」という理由で残置したものが11冊ある。『蹇蹇録』は3冊を残置したが、うち1冊は「葇蕤版にして版下の自筆なるや否や不明、且、活版本もあれば残置せり」、残り2冊は「美しき写本なれど、新しく、蔵印、受入番号、ラベル、カード目録等無く、素性不明書に付き残置せり」とある。よって、貴重性を判断する基準の一つとして複製かどうかという点があり、さらに複製の時期が重視されたとと言える。

### 3.1.4 事故図書調査

事故図書の項目には、47部の書名と事故の内容が記載されている。事故の内容は、書名不記、蔵印なし、受入番号なし、分類番号なし、貴重書の記号なし、カード及び原簿不明、カードの再製の7種類ある。事故を理由に疎開を取り消した和漢書はないことから、本調査は疎開すべきかどうかを判断する調査ではないと言える。

不備が確認された和漢書に対しては「帙の表書により書名推定」、「表紙脱落のため書名不明、内容により書名仮定」等対応すると共に、「内題の表記を要す」、「原簿には「東大寺文書」とあり書名の統一を要す」、「疎開点



検の際発見につき増加の手續を要す」等、必要な処理が記載されている。

### 3.2. 目録作成過程にみる第1次文献疎開の特徴

4つの点検作業についてそれぞれの作業内容を分析した結果、疎開書選定作業の具体的な手順や基準が明らかとなった。現物およびカードで旧目録に掲載された和漢書の書誌情報を確認し、正確な点数の把握に務めると共に、一部の書物は比較的時期が新しい複製本であることを理由に疎開を取り消した。これらは正確性を追求する緻密で丁寧な作業であった<sup>19)</sup>。

第1次文献疎開当時の現場ではそのような作業が可能であったという点も重要であろう。『疎開点検目録』と『疎開荷造目録』の資料全体を通して書名や点検番号、備考欄に至るまで全て楷書で丁寧に書かれており、これらの字体や筆跡も勘案すると、和漢書選定だけでなく荷造りや運搬もある程度落ち着いた状態の下で行われていたことが推測される。

## 4. 疎開本の選定

### 4.1. 分野の比重

『疎開点検目録』と『疎開荷造目録』には疎開した和漢書全ての図書番号、すなわち和漢書の分野を示す分類番号が記載されている。疎開した和漢書の点数を部門別、分野別に調査した結果を表1(次頁)に示した。疎開地別に見ると大覚寺へは1,025冊、保津村へは1,980冊が疎開されており<sup>20)</sup>、保津村行の疎開書は大覚寺の2倍となった。

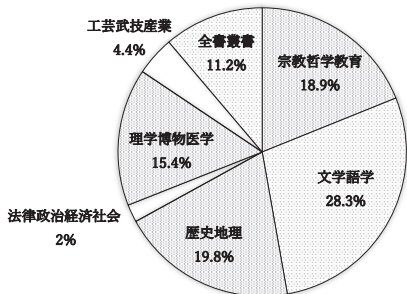


図2 第1次文献疎開で疎開した和漢書の分野  
『本館所蔵貴重和漢図書疎開点検目録附点検控』、  
『学時年報書類 昭和19年4月～昭和22年3月』  
(京都大学大学文書館所蔵)より作成。

部門別の割合を示したものが図2である。文学語学が最も多く、宗教哲学教育、歴史地理、理学博物医学は同程度の割合である。ただ、表1によれば、各部門の和漢書数は疎開地による偏重が見られ、特に保津村へ疎開した「医学」分野の「和漢古方按摩」(種別番号7-02)の多さが目立つ。これらの和漢書は京都の医家である百々家から寄贈された書物が中心で<sup>21)</sup>、生

表1 疎開した和漢書の分野別、疎開地別点数

大分野	小分野	疎開地						
		大覚寺 (甲地)	保津村 (乙地)					
第一門 宗教哲学 教育	神道史 伝記祭祀縁起	5	2	第四門 文学語学 (続き)	物語 草紙 日記	137	88	
	神道各論	0	1		小説 (王朝以後)	6	10	
	耶蘇教史 伝記	0	1		元禄文学	0	100	
	耶蘇教史 各論	0	2		支那戯曲小説	15		
	仏教総記	12			雑話	0	3	
	仏教史 伝記	25			書目及雑目	6		
	寺院 縁起	1			音韻 假名遣	1		
	仏教各宗 経律	9	46		節用 故事熟語 名数	0	8	
	仏教各宗 論	2			支那字書	8	8	
	禪宗 語録	20	2		韵学訓話 説文	3	51	
	仏教各宗雑論 (新著)	47	28		小計	257	556	
	教育史 伝記	2			第五門 歴史地理	本邦史 総記	18	1
	五経総義	4	38			史料	0	1
	易経		4			古代史	47	4
	書経 詩経	20				王朝史	4	13
	春秋		1			鎌倉史	24	8
	四書	10	55			南北朝史	0	3
	老荘	16	12			徳川史	0	100
	諸子		1			儀式典礼 有職故実	31	
	儒家	54	36			考古 (歴史)	4	158
日本哲学総記		3	支那古代史	0		30		
日本哲学各論		45	支那近世史	0		8		
教訓及武士道		3	朝鮮史	11		35		
女訓	5	3	本邦人各伝	2				
小計	232	283	本邦人言行録	0		1		
第二門 法律政治	本邦法制	5	2	本邦人系譜		2	1	
	支那法制 朝鮮法制	0	23	支那人伝記	3	8		
	法理学及羅馬法	0	1	本邦各部地誌	1	2		
	外国法及法律雑記	0	1	本邦地図 歴史地図	10	1		
	和漢政書	1	15	本邦紀行	1	5		
小計	6	42	支那地理	0	40			
第三門 経済社会	風俗	7	0	外国地理	6	0		
	公娼及私娼	0	3	小計	164	419		
	小計	7	3	第六門 理学博物	天文 星屑	0	2	
第四門 文学語学	漢文学史	3	0		地文	13	0	
	選集 (衆人)	16	9		博物総記	0	3	
	全集 (個人)	0	141	本草	88	16		
	作文 (漢文) 文話	0	2	小計	101	21		
	漢文集	6	23	第七門 医学	医学史 伝記	1	0	
	漢詩学 詩話	12	42		和漢古方 按摩	26	359	
	漢詩集 (本邦人)	0	17		解剖及組織	4	1	
	漢詩集 (支那人)	2	6		治療法 処方	1		
	作文 (普通文)	1			外科	2		
	国文学総記 文学史及伝記	1		小計	34	360		
	歌集及国文集	29	29	第八門 工芸武芸	和漢兵法	0	1	
	連歌俳諧	1	6		和漢武芸	19	0	
狂句 狂歌 狂詩 戯文	0	2	戦史		0	2		
謡曲 狂言	10	10	書画 文房具		9	1		
俗曲 歌謡	0	1	書		6	14		
			画		7	15		
			彫刻 篆刻	2	0			

第八門 工芸武芸 (続き)	漆工及金工	1	0
	考古(美術)	2	0
	音楽(東洋)	0	1
	能 狂言 田楽 神楽	2	0
	演劇 舞踏	0	4
	骨相手相	0	1
小 計		48	39
第九門 産業	水運		12
小 計		0	12
第十門 全書叢書	叢書(本邦)	0	37
	叢書(支那)	49	
	類書 拔萃(本邦)	72	134
	類書 抜粹(支那)	1	10
	随筆 雑書(本邦)	0	2
	随筆 雑書(支那)	0	10
	雑誌(支那)	0	0
小 計		122	193
合 計		971	1,928
図書番号記載なし*		54	52
総 計		1,025	1,980

〔本館所蔵貴重和漢図書疎開荷造目録〕より作成。該当書物がない分野は分野名と冊数の記載を省略した。

\* 図書番号が空欄の書物(63点)、「維新」「京」「宗教」「河合本」「国史」と記載があり図書番号が不明のもの(43点)を指す。

うち貴重和漢書は345冊だが<sup>23)</sup>、そのうち344冊の書名を『疎開点検目録』でも確認することができた<sup>24)</sup>。疎開された和漢古方分野の和漢書のほとんどは、1942年時点で既に貴重和漢書扱いであったと言える<sup>25)</sup>。

よって、附属図書館の蔵書に占める比重は決して大きくない和漢古方分野の書物が、疎開本全体に占める割合が突出しているのは、もともと和漢古方に区分されていた書物に古典籍が多く貴重書が多かったためである。和漢古方分野の数の多さは、疎開図書を選定する基準として医学や薬学という学問分野を重視したというよりは、既に貴重書に指定されていた結果であった<sup>26)</sup>。

以上より、旧目録の作成作業は、結果的には『京都帝国大学和漢図書分類目録 第四冊医学』に記載されている貴重和漢書を中心に抽出したものである。学問分野に関係なく貴重和漢書であれば旧目録及び追加目録に掲載されていたとなると、他の分野の書物についても、貴重和漢書に既に指定されていたものは旧目録か追加目録に収録されているはずである。

附属図書館は1938年に総記類(『和漢書分類目録 第一』)、1939年に理学(『和漢書分類目録 第二』)、1941年に工学(『京都帝国大学和漢図書分

薬の調合方法や治療の仕方を漢文で述べた和漢古方の書物ばかりである。

## 4.2. 和漢古方の和漢書

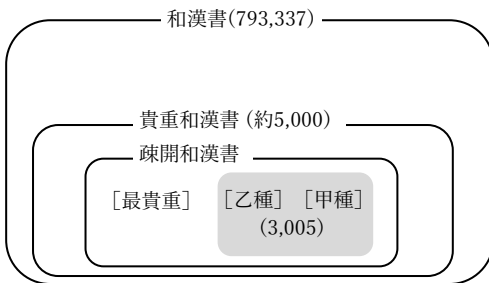
なぜ、和漢古方分野の和漢書はそれほど多く疎開対象となったのか。

戦前期の京都大学では附属図書館以外に各学部でも大量の蔵書を有していたが<sup>22)</sup>、1942年に『京都帝国大学和漢図書分類目録 第四冊医学』が附属図書館によって作成され、学内全体の蔵書状況を把握することが可能となった。同書には、附属図書館及び各部局が所蔵する和漢書の書名と所属先(研究室名等)、書誌情報が記載され、附属図書館所属の貴重和漢書には、さらに「貴」の記号が附されている。同書「和漢古方」分野に記載されている書物の

類目録 第三冊工学』)の各部門についても全学的な目録調査結果を刊行した。これら3冊の目録に貴重書として記載されている附属図書館所蔵の和漢書についても同様の調査を実施した結果、すべて旧目録及び追加目録に記載されている書名と一致した。

よって、文献疎開以前から貴重書に選定されていた和漢書のほとんどは、

図3 京都大学附属図書館所蔵和漢書と第1次文献疎開における疎開和漢書の関係



『京都大学附属図書館六十年史』『本館所蔵貴重和漢図書疎開点検目録附点検控』より作成。( )は冊数, [ ]は疎開和漢書の種別。

よそ6割程度が第1次文献疎開で対象になったと思われる(図3)。

### 4.3. 秘本

では、疎開図書を選定する際に書物の内容は全く加味されなかったのか。保津村へ運ばれた和漢書の中に、明らかに書物の内容が重視されたと思われる一群がある。『疎開荷造目録』によれば、これらの書物は行き先が保津村であることを示す「乙」という記号に加え、別途「秘」という文字も記載され、秘本として扱われた。保津村へ運ばれた荷箱のうち、最後の43番目の荷箱にすべて収納されていた。

秘本は133冊にあり、書名と和漢書分類目録番号の一覧を示したのが表2である。そのほとんどが第四門文学語学の「元禄文学」(和漢書分類番号4-42)に該当する。井原西鶴の作品をはじめ、『色道後日男』や『遣放三番続』など元禄期に京都で浮世草子の出版に成功した八文字屋による書籍も含まれており<sup>27)</sup>、浮世草子、特に好色本が多い。3.1.1項での検討結果より、これらの秘本は貴重和漢書であったと考えられる<sup>28)</sup>。元禄期の文芸作品は明治半ば以降、盛んに流布されるようになるが、娯楽性の高い浮世草子は

文献疎開の際にも疎開書物として選定されたと言えよう。ただし貴重和漢書として旧目録と追加目録に収録されていても、残置調査の結果、複製のため疎開対象外となった和漢書もある。本稿で取り上げた疎開和漢書(乙種, 甲種)は3,005冊であるが、それ以外に最貴重書として大覚寺へ運ばれた疎開書が350冊あるため、当時附属図書館が所蔵していた貴重和漢書のおお

表2 秘本の書名一覧

風俗壊乱を理由にか度々発売頒布が禁止されており<sup>29)</sup>、西鶴の著作はその最たるものだった<sup>30)</sup>。特に戦前期の厳しい出版検閲制度の下において、秘本扱いの書物は発禁処分を受けた閲覧禁止本であったと推測される<sup>31)</sup>。

小黒は1944年4月半ばに内務省・文部省合同で図書館の発禁図書類の管理状況などに関する臨検が実施され、翌月半ばに通牒「図書館備付出版物の取締に関する件」が発せられた点を指摘する<sup>32)</sup>。これにより京大で第1次文献疎開が実施された時期は、発禁処分を受けた図書の管理が全国的にさらに強化された時期とも推測される。1944年5月の文献疎開案でも、疎開本の選定にあたっては「但し事情に依り1の内秘本153点(中略)を留保することある可し」とされ、これらの閲覧禁止本を含んだ一群を大学に残置する可能性にも言及している<sup>33)</sup>。

秘本の多くは現在、京都大学貴重資料デジタルアーカイブで公開されている。京都大学蔵書検索(kuline)では書誌情報として内容に関する略記も見られるが、略記は第1次文献疎開当時に和漢書の取扱担当であった鈴鹿三七<sup>34)</sup>による調査を元に、戦後作成された事務用目録『鈴鹿目録』からの転載である。

略記の一部を紹介する。『雨夜三杯機嫌』は、「題簽に京都江戸大坂とある如く、三都の名優の肖像を画き、上欄に狂詩を題し、評言を付す。又下巻には顔見世吟等十八項の狂詩を付す。本書は実に稀観書

書名	和漢書分類番号
風流御前義経記	4-42
風流遊貴之衛士香	4-42
飛鳥川当流男	4-42
阿奈遠加志	4-30
好色江戸紫	4-42
好色俗紫	4-42
栄花遊二代男	4-42
風流連理戀	4-42
風流鏡ヶ池	4-42
雨夜三杯機嫌	8-66
色道後日男	4-42
色道修行男	4-42
吾妻男仙伝枕	4-42
遣放三番続	4-42
当世女容気	4-42
色の染衣	4-42
御前独狂言	4-42
諸分姥桜	4-42
魂胆遊婢窟	4-42
浮世栄花一代男	4-42
諸訳名女田葉粉	4-42
諸国此頃好色覚帳	4-42
西鶴伝授車	4-42
催情記	4-40
藐姑射秘言	4-30
当流雲のかけはし	4-42
色男岩つゝじ	4-40
諸艶大鑑	4-42
武道継徳梅	記載なし
浮世親仁形気	4-42
本朝美人鑑	8-44
正倉院東大寺宝図	8-41

『本館所蔵貴重和漢図書疎開点検目録附点検控』及び『本館所蔵貴重和漢図書疎開荷造目録』より作成。

なり。大正七年珍書保存会にて影刻される<sup>35)</sup>」と附属図書館に受け入れるまでの経緯と書物の貴重性を評価する記述が見られる。

『当世女容気』は、「浮世草子好色五人女を内題のみ改刻して題名をも変じて再刊したるものなり。伝本頗る稀なる上に原装にして題簽をも備へるは実に貴し。題簽には新板絵入りと頭注せり。刊年は記せざるを以て明かならざれども浪華書肆順慶町壱丁目抱玉軒田原兵衛梓とあり。<sup>36)</sup>」と書物の各部位に関する丁寧な分析も見られる。

『藐姑射秘言』については、「記するところ淫猥に亘れどもその文章の雅麗なるは実に名作と称すべし。密かに之を印行したるものなれば流布甚だ尠なし。後編の跋には文政六年秋の年記あり。その□<sup>(ママ)</sup>作の時を知るべし。本書初編後編の具備せるは珍し。<sup>37)</sup>」と文体に対する評価や希少性について述べられている。

略記の記述からは鈴鹿の和漢書に関する知識や技術、文学的重要性に対する深い理解が読み取れる。第1次文献疎開を開始した当初はこれらの発禁本を疎開させるかどうかは未確定であったものの、最終的には疎開本に選定された。どのような検討を経て疎開させることが決定したのか詳細は不明であるが、当時の和漢書掛が学術的価値を優先させた可能性も考えられるだろう。

## 5. 第2次文献疎開

### 5.1. 実施決定に関する分析

1945年に実施された第2次文献疎開について、疎開目録の存在は確認できない。第1次文献疎開とは事業の性質が異なり疎開目録を作成されたのかどうかさえ不明であるが、その背景について次に見ていきたい。

1944年4月の図書館商議会では、第1次文献疎開では最貴重図書だけでなく準貴重図書や特殊文庫、寄託図書を中心に第2次文献疎開を実施する方針も決議した。具体的な実施日程は未定だったが、第2次文献疎開を実施することは既定路線だった。

1945年6月下旬から7月にかけて、第2次文献疎開の実施が決定した。前述した通り、第2次文献疎開の実施は予定されていたので、第1次文献疎開以降、現場ではある程度実施に向けて準備が進められていたと推測されるが、実施決定は突然だった<sup>38)</sup>。この間、日本を取り巻く戦況は一段と悪化しており、1945年3月における大都市夜間空襲で帝都東京をはじめと



する都市は壊滅し、中小都市でも焼夷弾による空襲が断続的に続いていた。

『京都大学附属図書館六十年史』によれば、京都府内政部長及び警察部長両名による通牒「文化財資料緊急疎開に関する件」の発出が第2次文献疎開の契機となったという<sup>39)</sup>。府内のどの団体や個人がこのような通牒を受け取ったのか不明であるが、京都大学の場合、京都府北桑田郡知井村にある知井国民学校が疎開先となった。第2次文献疎開の実施が決定した当初、大学は1944年4月の商議会でも疎開先として候補に挙がっていた随心院（現在の京都市山科区）への疎開を検討していたが、空襲の危険性を考慮した京都府の指導により京都市内を避け、知井国民学校へ決まった（図1）。

通牒「文化財資料緊急疎開に関する件」が発せられた背景には何があったのだろうか。戦況の悪化に加えて、このような通牒が発出された主な要因として、本稿では京都府の文化財疎開の動きに注目したい。

京都府では1941年4月より、宗教団体に関する法律（宗団法）制定に必要な各寺院の基本財産を調査するため、学務部社寺課で寺院重宝調査を開始した。宗団法の制定は結局戦後へ持ち越されたが、当時は法律制定のための準備調査という点で法的強制力を伴う調査であった。

寺院重宝調査の対象は、京都市内及び郡部の寺院所蔵の文化財であった。本来全国で実施されるべき調査であったが、他府県ではほとんど成果が挙がらず、京都府において特に調査を完遂できたのは社寺課主事で文化財保護係官であった赤松俊秀の尽力によるところが大きかったという<sup>40)</sup>。社寺課寺院重宝臨時事務嘱託として調査に従事した林屋辰三郎の回想によれば、調査の結果、明治期の同様の調査では書き上げられていない文化財がかなりの数に及んでいたといい、調査が終了した段階で、次は寺院重宝の疎開が新しい課題となってきていたという<sup>41)</sup>。寺院重宝調査が終了したのは1943年12月頃と見られる<sup>42)</sup>。

学務部社寺課は1943年に内政部社寺課となり、同年12月14日閣議決定「国宝重要美術品の防空施設整備要項」を契機として、1943年度から1945年度まで国宝や宝物類を京都府下各地へ疎開させている<sup>43)</sup>。寺院重宝調査終了による文化財疎開の開始時期は1943年12月頃と見られる。

よって、内政部が関与した通牒「文化財資料緊急疎開に関する件」は、1943年度から開始した京都府の文化財疎開事業の最終段階に、寺社以外の文化財所有団体へも発出されたものと考えられる。詳細については今後の調査が必要であるが、京都大学附属図書館の第2次文献疎開は、京都府主



導で実施していた文化財疎開の流れが大学へも波及した結果、実施されたのだろう。

## 5.2. 全学的な規模

第2次文献疎開は、参加を表明した学部も含み全学的な規模で実施された<sup>44)</sup>。附属図書館は京都府内政部学務課に対する大学側の窓口として、部局への連絡、図書のとりまとめ、荷造り、運搬を担った。1945年7月6日ごろには各部局へ文献疎開の実施が伝えられ、参加する学部や講座、研究室から図書が続々と運び出され附属図書館前に積まれていった<sup>45)</sup>。7月7日時点の調査では13万点を超える図書を疎開させる計画であった<sup>46)</sup>。これらの荷造りや搬入は附属図書館職員だけでは間に合わず、附属図書館は学生課へ勤労奉仕の学徒動員を申し出て、7月6日から15日まで毎日20名の学生が整理作業や荷造に従事した<sup>47)</sup>。疎開地への輸送には、京都府側が用意した木炭トラックも用いられたという。

折しも、7月初旬には空襲による延焼からキャンパスを守るため、附属図書館の建物の取り壊しが計画された<sup>48)</sup>。当時、大学全体で推進されていた建物疎開の一環であったが、附属図書館の場合、3つの書庫を除いた木造の建物や廊下が取り壊されることとなり、疎開図書の運び出しと建物の取り壊しが同時に進行していた。

## 5.3. 第1次文献疎開との相違

第2次文献疎開については資料的制約が大きく事業の全容を実証するのは困難であるため、第1次文献疎開と比較することでその特徴を考えてみたい。

まず、実施された時期について、第1次文献疎開が実施された1944年4月から6月は、本土空襲が本格化する前であった。1944年7月にサイパン島が陥落すると秋以降、軍需工場を狙った米軍の本土空襲が始まるが、1945年3月以降は焼夷弾を使った無差別爆撃が展開される。第1次文献疎開は戦況の悪化に伴い空襲が激化する前であり、敗戦直前に開始された第2次文献疎開とは現場の雰囲気も大きく異なるものであったと考えられる。

次に、事業の性質について、第1次文献疎開は商議会で実施を決議しており、既定の意思決定手続きを経たのに対し、第2次文献疎開は京都府の文化財疎開の最終段階に、文化財所有団体へ向けて発せられた通牒を受けて突発的に実施された。第2次文献疎開の実施を商議会で審議したのかど

うかは不明である。

最後に、事業規模について、第1次文献疎開では約2か月の準備期間を経て荷箱数71を疎開させたのに対し、学部の図書も含んだ第2次文献疎開の荷箱は3700余りであった<sup>49)</sup>。規模が飛躍的に増大したにもかかわらず準備期間は1か月程度であった。附属図書館は自らの蔵書の疎開に加えて、部局の疎開図書を取りまとめる立場でもあり、現場が混乱したことも考えられる。第2次文献疎開時の目録が作成されたのかどうかさえ不明である背景には、事業規模や性質が第1次文献疎開と異なる点が指摘されよう。

京都大学附属図書館における文献疎開は、実施時期により事業の質が変化したと言えるだろう。文献疎開の変質性は、近代戦の特徴を考慮すれば他の地域にもある程度共通する可能性があり、関係資料の残存状況にも影響を及ぼす重要な要因と考えられる。

## 6. おわりに

本稿で得られた知見を以下にまとめる。

1. 京都大学附属図書館の第1次文献疎開時に作成された疎開和漢書の目録2点を分析し、本館所蔵貴重図書目録は原則として貴重和漢書から抽出して作成し、その上で複製に注視した選定を実施し、新目録と追加目録を完成させたと明らかにした。点検作業からは、正確な書誌情報や書物の貴重性に対する評価を徹底して追求する職員の姿勢がうかがえる。本土空襲が本格化する以前に実施された第1次文献疎開は、緻密な作業を可能とする状況下で実施されていたと推測される。

2. 第1次文献疎開では大覚寺へ1,025冊（荷箱数28）、保津村へ1,980冊（荷箱数43）、計3,005冊（荷箱数71）の和漢書が疎開された。これらは、当時附属図書館が所蔵していた貴重和漢書の6割程度と見られる。保津村行の和漢書の中には閲覧禁止本も含まれ、秘本として取り扱われた。

3. 第2次文献疎開の目録は存在が確認できないが、その背景として実施決定過程や実施方法、事業規模が第1次とは大幅に異なり、事業そのものの性質が変化した点を指摘できる。文献疎開事業の変質性は戦時下の図書館界に広く共通し、事業の本質的側面を表す要素と考えられるが、更なる調査は今後の課題としたい。

謝辞

京都大学附属図書館の皆様には『本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録 附点検控』『本館所蔵貴重和漢図書 疎開荷造目録』『鈴鹿目録』の利用に際して大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

## 注

- 1) 奥泉和久『近代日本公共図書館年表 1867-2005』日本図書館協会, 2009. その他『秋岡悟郎著作集-図書館理念と実践の軌跡-』(秋岡悟郎, 日本図書館協会, 1988), 『図書館を生きる-若い図書館員のために-』(清水正三, 日本図書館協会, 1995), 「図書館の本の疎開前後」(大窪太朗『書陵部紀要』Vol.30, 1978)やモリソン文庫(現東洋文庫)に関する『秃筆漫録』(星斌夫『秃筆漫録』星斌夫先生退官記念事業会, 1980)など。大学図書館に関しては『九州大学百年史』通史編Ⅰ([オンライン]九州大学百年史編集委員会, 2017)や『東京大学百年史』通史二(東京大学百年史編集委員会編, 1980)など各大学の沿革史や部局史参照。特に東京大学附属図書館の場合, 当時の図書館職員が戦後にまとめた記録「山梨へ本の疎開」(青野伊豫児『図書館の窓』Vol.16, 1977. 4-5.)や『色のない地球儀 資料・東大図書館物語』(薄久代, 同時代社, 1987)が見られる。
- 2) 廣庭基介「十五年戦争期における京大図書館の史的考察」『花園大学文学部研究紀要』Vol.41, 2009. 金高謙二『疎開した四〇万冊の図書』幻戯書房, 2013.
- 3) 拙稿「京都帝国大学における図書疎開-附属図書館所蔵貴重和漢書の事例を中心に-」『京都大学大学文書館研究紀要』Vol.18, 2020. 3, p.54.
- 4) 旧帝国大学に限れば, 学部自治の観点から実施するかどうかという判断や疎開先の選定は学部や研究所, 講座単位で異なる場合がありその結果散発的に実施された。『九州大学百年史』は「学科の性質等により図書や研究施設の移転の難易度が異なるため, 大学全体での疎開は終了することなく敗戦を迎えた」と指摘する(前掲『九州大学百年史』通史編Ⅰ, p.755. [引用日: 2022-03-27] <URL: [https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac\\_download\\_md/1801084/chapter\\_5-3.pdf](https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/1801084/chapter_5-3.pdf) >)。東北大学の場合も法文学部の文献疎開について, 疎開委員だった桑原武夫の回顧録によれば学部教授会で計画を樹立法文学部単独で実施を進めた(桑原武夫『桑原武夫集10』岩波書店, 1981, p.388-405)。京都大学も評議会ではなく各部局で審議し, 文学部の場合はさらに講座ごとに判断が異なったようである(前掲「京都帝国大学における図書疎開-附属図書館所蔵貴重和漢書の事例を中心に-」p.60-61)。
- 5) 前掲「京都帝国大学における図書疎開-附属図書館所蔵貴重和漢書の事例を中心に-」。

- 6) 管見の限りこれほど詳細な情報が含まれている疎開目録は他には確認できない。中国文学研究者であった京都帝国大学文学部教授倉石武四郎（1940年4月から1949年5月は東京帝国大学文学部教授兼任）の主導と推測される、中国文学の書物を疎開した際の目録『支哲文学疎開図書目録』（東京大学東洋文化研究所所蔵）は、京都帝国大学の用箋約60頁に疎開書物の名称、冊数、納めた荷箱番号、所在情報と見られるアルファベットと数字のみが記載されている。これらは疎開に必要な最低限の情報と見られ、目録作成日や作成者、作成の背景等は不明である。
- 7) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』資料編1、財団法人京都大学後援会、1999、p.734-735.
- 8) 京都大学附属図書館『京都大学附属図書館六十年史』京都大学附属図書館、1961、p.172.
- 9) 同上書、p.187.
- 10) 同上書、p.188.
- 11) 同上書、p.184.
- 12) 以後、特に断りのない限り2.2の記述に関する出典はすべて『本館所蔵貴重和漢図書疎開点検目録附点検控』（京都大学附属図書館所蔵）である。
- 13) 「本館所蔵貴重和漢図書疎開点検目録」の項目は、疎開文献点検掛と貴重和漢書掛の作成による。疎開した和漢書の書名（五十音順）、点検番号、書名、冊（点）数、改訂冊（点）数、書誌略記、受入番号、図書番号、種別、荷箱番号、荷造冊（点）通号、点検控参照、備考欄が設定されている。
- 14) 筆者は以前、目録作成過程の大まかな流れを指摘した（前掲『京都帝国大学における図書疎開－附属図書館所蔵貴重和漢書の事例を中心に－』p.56-57）が、「点検控」の十分な検討が不足していたため、旧目録と新目録は別個に存在するという認識に基づいた指摘であった。本稿では「3. 目録作成過程の分析」において「点検控」を調査した結果、旧目録と新目録は物的には同一であることが新たに判明し、認識を改めた。
- 15) 以後、特に断りのない限り2.3の記述に関する出典はすべて『本館所蔵貴重和漢文献疎開荷造目録』（京都大学附属図書館所蔵）である。
- 16) 前掲「点検控」『本館所蔵貴重和漢文献疎開点検目録』.
- 17) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』p.188.
- 18) 前掲「本館所蔵貴重和漢文献疎開点検目録」『本館所蔵貴重和漢文献疎開点検目録』.
- 19) このような緻密さは『疎開点検目録』の前半部分にある書名一覧にもうかがえる。例えば『集驗良方考按』では「本館所蔵貴重図書目録」では「〔按〕」の字が欠落しており補った」という記載が備考欄に見られる。
- 20) 当初予定していた疎開和漢書数は3,471冊であったため、実際には減少したことになる。
- 21) 附属図書館創立期に百々蔭陰とその父南岳の故人記念図書として百々復太郎が

5,749冊を寄贈した（『京都帝国大学附属図書館案内』1908. 4, p.17）。『疎開点検目録』の書誌略記欄には百々家の蔵書であったことをうかがわせる記載が見られる。

- 22) 篠塚富士男「昭和初期の大学図書館」『大学図書館研究』Vol.36, 1990, p.2-5.
- 23) 『京都帝国大学和漢図書目録第四冊医学』には書名だけでなく書物の別名や外題、附録部分の名称も目録化している場合があり、同一書物の情報が重複して掲載されている。和漢古方分野の貴重書344冊にはこれらの重複は含まれない。
- 24) 和漢古方の貴重書のうち卷子の『薬字抄』（写本）のみ疎開対象とならなかったがその理由は不明である。
- 25) ただし当時の貴重書選定基準は管見の限り不明である。
- 26) 『京都帝国大学和漢図書分類目録 第四冊 医学』には登録されておらず書名が確認できないが実際には疎開された和漢古方分野の書物も52冊確認される。『醫書目録稿本』『温疫論私定類題稿本』『温疫論翼訳稿本』『温疫論翼訳第二稿本』『温疫論要領撮要稿本』等であるがこれらがどのような基準で選定されたのかは不明である。
- 27) 『鈴鹿目録中巻』p.118, p.132（京都大学附属図書館所蔵）。『鈴鹿目録』は事務用目録であるため図書登録はされていない。
- 28) 井原西鶴著『日本永代蔵』も「本館所蔵貴重和漢図書疎開点検目録」（『疎開点検目録』）に書名が見られるが取り消し線が引かれている。備考欄には「カードに貴重書より普通書に変更しあるにつき削除す」とあり、西鶴の著作であっても普通書は疎開対象外であった。
- 29) 秘本の『阿奈遠加志』は1910年に翻刻本が発禁処分を受けたことが確認できる（国立国会図書館編『国立国会図書館所蔵発禁図書目録 - 1945年以前 -』国立国会図書館, 1980, p.3）。
- 30) 山田清作「稀書複製会の西鶴期」『西鶴研究資料集成』株式会社クレス出版, 1942, p.247-250. なお1927年刊行の翻刻本『西鶴全集』も発禁書となった（前掲『国立国会図書館所蔵発禁図書目録 - 1945年以前 -』p.3）。
- 31) 帝国図書館でも閲覧禁止本のなかに写本等の和装本だけの一群があり、その中に井原西鶴による『好色一代男』と『好色二代男』が含まれ治警処分後に閲覧禁止本となった（大滝則忠「戦前期出版警察法制下の図書館 - その閲覧禁止本についての歴史的素描 -」『参考書誌研究』Vol.2, 1971. 1, p.51）。
- 32) 小黒浩司「明治大学図書館蔵『検閲週報』について」『図書の譜：明治大学図書館紀要』Vol.14, 2010. 3, p.208-212.
- 33) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』p.188. 理由は不明だが、実際に疎開された秘本は当初予定数より減少している。
- 34) 「職員調査票（昭和十九年六月十日現在）」『雜綴』（京都大学大学文書館所蔵）。
- 35) 『鈴鹿目録下巻』p.132（京都大学附属図書館所蔵）。
- 36) 前掲『鈴鹿目録中巻』p.125.
- 37) 前掲『鈴鹿目録中巻』p.93.

- 38) 附属図書館では1945年6月15日付で「昭和二十年度目録掛図書掛実施予定計画案」が作成されたが同計画案には文献疎開に関する言及はみられないため、第2次文献疎開は6月下旬以降に突然実施が決定したと推測される（「京都帝国大学附属図書館昭和二十年度目録掛図書掛実施予定計画案」『自昭和十九年至昭和二十年 雑書類 図書館』（京都大学大学文書館所蔵））。
- 39) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』p.190.
- 40) 林屋辰三郎「『寺宝調査』のころ」『京都国立博物館学叢』Vol.4, 京都国立博物館, 1982. 3, p.167.
- 41) 同上「『寺宝調査』のころ」p.169.
- 42) 寺院重宝調査に基づき京都府が各寺院の規則制定を認可する業務を行うが、認可業務の最終日は1943年12月7日である（『京都府広報』第1726号, 1943年12月7日）。
- 43) 「国宝及宝物類疎開状況に関する件」『内政部事務概要』（京都府立京都学・歴史彩館所蔵）。
- 44) しかし評議会で審議された形跡はなく、全学的な公式事業と位置づけることはできない。
- 45) 『教授会記録 昭和二〇年 昭和二一年』1945年7月6日（京都大学大学文書館所蔵）。
- 46) 学内全体で疎開させる書物は1945年7月7日時点の調査で約13万1,100冊であった（前掲『京都大学附属図書館六十年史』p.190）が、途中で敗戦を迎え中止となったため全ての書物が疎開された訳ではない。
- 47) 「学徒勤労奉仕のため動員方願出の件」『自昭和十九年至昭和二十年 雑書類 図書館』（京都大学大学文書館所蔵）。
- 48) 「図書館所属木造建物の中取壊すべき部分一部変更通知の件」（前掲『自昭和十九年至昭和二十年 雑書類 図書館』）。
- 49) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』p.190.